

## 白川静のことば

《33》



金子都美絵・画

犬牲のみでなく、人をもともに埋めて、地中から侵入してくる埋<sup>ま</sup>蠱<sup>い</sup>といわれる邪気を祓<sup>はら</sup>う呪法があり、それを伏瘞<sup>ふくえい</sup>という。

〔中略〕

伏瘞の方法は、陵墓などの定礎として、すなわち、奠<sup>てん</sup>基<sup>き</sup>として行われるが、祖霊を祀る建物にも犬牲を用いる。犬牲で清めたものが家である。豕は豚ではなく、古い字形では豕<sup>ぶ</sup>、犠牲とされた犬である。それが建物でなく、屋外の封土に施されるときは冢<sup>ちやう</sup>という。冢と冢とは、内外の差にすぎない。突は塞<sup>さい</sup>神<sup>のかみ</sup>と同じく、土穴のうちに犬牲を用いるところをいう。竈<sup>そう</sup>突<sup>と</sup>（かまどの煙抜き）というように、その煙抜きのところは、やはり呪的な儀礼を必要とする重要なところとされたのである。大きな建造物においても、犬牲は欠かせないものである。たとえば京は凱旋門の形で、戦死者の屍骨を塗りこんだ呪的なものであるが、そこにも犬牲を埋める。それが成就、すなわち落成の式であった。

『中国古代の文化』講談社学術文庫 P229~230

